

容認可能な無住集落の形：石川県民を対象とした調査  
Acceptable Uninhabited Hamlets: Survey of Ishikawa Residents

林 直樹\*

Naoki HAYASHI

## 1 背景・目的

否定的なイメージのある無住集落であるが、実態としては多種多様であり、再興の可能性が残っているような集落もあれば、自然に戻りつつある集落もある。筆者は、活性化が難しい場合の集落づくりの選択肢として「再興可能な無住集落」というものを検討している<sup>(1)</sup>。本研究の目的は、そのような形が「容認可能か（受け入れ可能か）」を明らかにすることである。なお、本調査では、原則として、大字単位の地理的範囲を「地域」、国勢調査の人口がゼロとなった農村の地域を「無住集落」と定義した。

## 2 調査の概要

2023年2月、石川県の住民を対象としたアンケートを実施した<sup>(2)</sup>。この調査では、回答者に表1の5種類の無住集落を提示し、それぞれについて容認（受け入れ）の可否を聞いた。ただし、「可否」については、①回答者と縁のない地域として考えた場合（以下「他地域」）<sup>(3)</sup>、②回答者の地域の将来として考えた場合（以下「自地域」）<sup>(4)</sup>の2種類がある。なお、表1の無住集落は、いずれも石川県内に実在する無住集落を参考に設定したものである。そのほか、回答者の地域が無住集落になった場合に考えられる心残り（以下「心残り」）<sup>(5)</sup>についても聞いた。

表1 回答者に提示した無住集落の形

Table 1 Uninhabited hamlets shown to respondents

内容	省略形
近隣に住む元住民や関係者が頻繁に通っている無住集落。田畑、家屋、神社なども健在。	通り維持
よく見られる農村の風景ではないが、キャンプ場として活用されている無住集落。	キャンプ場
一面がソーラーパネルで覆われている無住集落。	太陽光
建物類が撤去された無住集落。一面が緑（雑草や雑木）に覆われつつある。	自然回帰
朽ちた家屋などが残っている無住集落。一面が緑（雑草や雑木）に覆われつつある。	荒廃

## 3 集計の結果

### (1) 無住集落の容認（受け入れ）の可能性

「他地域」「自地域」の容認（受け入れ）の割合を表2に示す。ただし、そもそもの質問や回答形式が異なるため、単純な比較はできない。なお、「自地域」には、「いかなる形であっても受け入れることはできない」という選択肢もあったが、選択数は1件であった。表3は、「心残り」に関する集計結果である。

\* 金沢大学人間社会研究域 Institute of Human and Social Sciences, Kanazawa University

無住集落、再興、通り

表 2 無住集落の評価：容認（受け入れ）可能の割合

Table 2 Assessment of uninhabited hamlets (percentages of acceptable)

	他地域	自地域
	選択率*（選択数／計算対象）	選択率（選択数／計算対象）
通い維持	64.7% (165/255)	79.1% (53/67)
キャンプ場	64.3% (162/252)	47.8% (32/67)
太陽光	45.9% (113/246)	22.4% (15/67)
自然回帰	47.0% (118/251)	25.4% (17/67)
荒廃	30.4% (77/253)	11.9% (8/67)

\* 「意見 A（容認）に近い」＋「どちらかといえば意見 A に近い」の選択率。

表 3 無住集落になった場合の心残り（可能性）：MA

Table 3 Regrets when the hamlet becomes uninhabited (possibility): MA

項目	選択率（％）
	N=69
家屋の管理や相続	63.8
田畑の管理や相続	42.0
山林の管理や相続	29.0
墓石の管理	46.4
住民が共同で管理する建物（例：集会所，神社）	24.6
住民が共同で管理する記念碑や石像など	10.1
子孫に「地域」の歴史などを伝えること（石碑の新設を含む）	11.6
元住民が集まって親交を維持する機会	13.0
特にない	14.5

#### 4 若干の考察

今回の調査では、「通い維持」が「再興可能な無住集落」に該当すると思われるが、当事者にとって受け入れ可能な形であることが示唆された。今後は、「心残り」（家屋の管理や相続）に留意しながら、「通い維持」に至る道筋について考えたい。

謝辞：本研究は、JSPS 科研費 JP17K07998 の助成を受けたものである。

【文献・注】(1) 林直樹・関口達也・小山元孝・松田晋・佐々木哲平・浅原昭生『将来的な再居住化の可能性を残した無居住化に関する基礎的研究—農村再生に向けて—（平成 27 年度国土政策関係研究支援事業研究成果報告書）』 (2) 20 歳代から 60 歳代までの石川県民を対象としたインターネット調査（マイボイスコム株式会社に依頼）。 (3) 表 1 のそれぞれの形について、意見 A（容認）と意見 B（非容認）のどちらに近いかを聞いた。意見 A（容認）は「残念なことであるが、特段わるいことともいえない」、意見 B（非容認）は「容認できない。関係者に対して、以前の状態に戻すよう努力することを求める」とした。 (4) 回答者は「農村」の住民のみ。質問文は、「（前略）現在、あなたがお住まいの地域が、遠い将来、無住集落になったと仮定してください。そのとき、あなたが受け入れることができそうな形は、次のどれですか」であり、回答は複数回答。 (5) 回答者は「農村」の住民のみ。質問文は「（前略）現在、あなたがお住まいの地域が、遠い将来、無住集落になったと仮定してください。そのとき、元住民やその親類の方々の心残りとなる可能性があるものは、次のどれですか」であり、回答は複数回答。